

デイヴィッド・ロッジ『交換教授』にみる 70年代文学部の英米比較

—— 学内作家の視点から ——

高橋まりな

1. 本稿の背景と目的

カズオ・イシグロの2017年ノーベル文学賞受賞は、英国大学の文芸創作 (creative writing) 科にとって象徴的な出来事であった。なぜならイシグロは、英国大学として初めて創作科を設置したイースト・アングリア大学の、初期の創作科出身者だったからである。日本で生まれたイシグロが英語で創作する技術を身につけ、国際的に評価される作家になるまでのプロセスを教育という観点から検討するとき、大学が果たした役割は小さなものではないだろう。

米国大学で創作が20世紀初頭からすでにカリキュラムの一部になっていたのに対し、英国の高等教育システムにおいては1970年に導入されたのが最初であった (Barry 2003 ; Wandor 2008)。そのため創作科は「アメリカの危険な発明品」 (Bradbury 1995) と見なされ、導入が検討された際には英文学部内に反発の声も多かったとされる。

本稿の第一の目的は、大学を舞台とする当時のひとつの小説の解釈を通して、こうした反発の土壌を当事者がどのように観察し描いたかを構造的に把握することである。また、この解釈のプロセスを通して、フィクションの分析から社会科学的知見を得るにあたっての制約を探索的に明らかにすることを第二の目的とする。

2. 本稿における英文学部の捉え方

英国大学に初めて英文学教授が誕生したのは1904年、オックスフォード大学でのことである。このとき教授に就任したローリー (Raleigh, Sir Walter) は、英国で教授職を得る前にはインドで英文学教授を務めていた。インド以外にも、たとえばスコットランドやカナダには、19世紀にすでに英文学という学科と教授職とが存在していた。イギリスの言語と文化とをセットで伝えることができる英文学は、「宗主国本国の文化がいかにすばらしいかを、植民地の人間に教える」 (大橋 1995, p.65) ために用いられたのである。大学にとっての英文学が国外においてイギリスらしさ (Englishness) を体現するものと捉えられていたとしたら、国内における英文学はどのように位置づけられていたのだろうか。

英国大学内で英文学の制度化が遅れた理由のひとつは、元来大学やパブリックスクールの教養

リストにおける「文学」が、ギリシャおよびラテン語作品を指していたことである。大学の外では、イーグルトンが『英文学』が、アカデミックな課目として最初に制度化されたのは大学においてではなく、職人専門学校、労働者専門大学、巡回公開講座においてであったという事実は、重要な意味を帯びていたことがわかる。英文学は、文字どおり貧乏人の古典となった」（イーグルトン 1997, p.43-44）と表現したように、大学に入ることのない人々に教養教育を行う手段として、文学は最適のものとなってきた。

イーグルトンが言うように、英文学が伝統的な意味での非エリートのために用意されたアカデミック領域だと考える場合、大学の大衆化にともない新興大学でさかんに英文学が教えられるようになったことは不思議ではない。またそうした大学において、英文学が「書くもの」ではなく「読むもの・学ぶもの」と前提されていたことは容易に想像できる。しかし実際には、英文学部への進学者が増加するにつれ、創作科の創設を待たずとも学内作家が次々に誕生していた。本稿が読解の対象とする『交換教授』はそうした作家による作品のひとつである。

3. デイヴィッド・ロッジと『交換教授』の背景

ロッジは1935年に英国の下層中流階級の家系に生まれた。彼は回顧録の中でこの1935年という年を、こうした社会階層の人間が将来作家になるには、「生まれてくるのに絶好の時」であったとしている。この世代は「すべての人への中等教育を無償化する1944年教育法の恩恵を受けた最初の世代であり、大学入学の競争で好結果を出せば生活補助給付つきで無償で授業が受けられた」ためである（Lodge 2015, p.1）。ロッジはユニバーシティ・カレッジ・ロンドンで英文学を専攻し1955年に学士号、1959年に修士号を取得した後、1960年からバーミンガム大学で教員として勤め始めた。小説『交換教授』は、1969年に客員准教授として半年間カリフォルニア大学バークレー校に滞在したことを契機に執筆され、1975年に出版された、ロッジの出世作である。

大学はロッジの作品に繰り返し描かれるモチーフのひとつである。そうした作品のうち『交換教授』（1975）、『小さな世界』（1984）、『素敵な仕事』（1989）は、後にキャンパス三部作と総称されるようになり、連作として扱われる。フィクションに主題が存在すると仮定すること、根拠を示してそれを特定することは困難だが、高等教育に関心を持つ読者を想定する場合、読者が各作品に以下のトピックを見出すことは難しくない。『交換教授』には大学紛争期の英米大学の差異と共通点、『小さな世界』には大学および学界の国際化、『素敵な仕事』には産学連携の試みと両者の間の断絶が描かれている。

英文学史の流れの中では、この三部作は英米のキャンパス・ノベルの系譜に代表的作品として位置づけられている。キャンパス・ノベルとは文字通り大学を主な舞台とする小説で、1950年代以降の作品を指して使われる文学研究のタームである。特徴として喜劇的・風刺的であること、しばしば書き手が大学の教員であることが挙げられる。ロッジは1950年代より前にすでに大学を描いていた小説と、キャンパス・ノベルに分類される小説との違いを、後者が「アカデミックスタッフの生活に焦点が当てられていること」である点に見出し「キャンパス・ノベルは戦後の高等教育拡大とともに、またより多くの小説家ないし小説家志望者が私と同じように大学の中に

職をえるとともに、発展をつづけていった」とその背景を説明している (Lodge 2011, pix)¹。

現在の英国では大学の英文学部に創作科が設置されること、そこに実務家教員として小説家が雇用されることは珍しくないが、60年代にはまだそういった環境がなく、ロッジの雇用は英国近現代文学研究者としてのものであった。ロッジは1963年に、英国最初のキャンパス・ノベル²の著者であるキングズレー・エイミスを題材に論文³を書いており、このことから、小説家としてだけでなく学術上の主題として分析的にキャンパス・ノベルに向き合っていたことがわかる。単に大学に身を置いた小説家であるというだけではなく、英文学を対象とする研究者であり、小説が学術的に読まれることに自覚的だったこと⁴は、彼の生み出すフィクションの背景として留意する必要があるだろう。

『交換教授』(原題 *Changing Places : A Tale of Two Campuses*) は特定の場所やできごとを想起させる風刺小説である。ただし、冒頭の断り書きでは、現実と「確かな類似がある」としつつも、舞台となる土地も登場人物も架空のものだと明記された。一方で、作中のできごとや登場人物の一部が、実際に起きたことや実在の人物を参照していると後にロッジ自身が解説している。また新聞記事やチラシとして作中に挿入されたテキストの中には、実在する他のテキストからの切り貼りもある。フィクションとして書かれたものではあるが、読者にとっては相対的に現実の近似と見なしやすい作品であるといえる。

教育学の観点からこの小説を論じたものに、高等教育研究者のアルトバックによる書評がある。「ジェット族⁵が映し出すもの」と題されたこの書評は、1986年に *The Journal of Higher Education* に掲載され、ロッジ著の2つのキャンパス・ノベル『交換教授』(1975)と『小さな世界』(1984)を合わせてレビューしている。アルトバックは大学教授を描く小説がアングロ・アメリカに長い伝統を持つと述べ、その中でもロッジの2作品は最高のものであると評価した。そしてロッジの物語が空想上のものであることを確認しつつも、「ブリテンと合衆国のコントラストがこれらの本に魅力を加え、また興味深い比較を提供している」(Altbach 1986, p.323)と現実世界に重ねたり、あらすじを紹介する中で架空の大学名に実在の地名を付して、読者がこの小説を現実と重ね合わせる手助けをしたりしている。

以上のような背景を踏まえても、本書は小説として発表された作品であるため、書かれたエピソード自体を現実の出来事と同一視する読み方には適さない。ただし、物語を構成する枠組みや物語世界を観察する視点には、当時の大学を理解するに当たって有用な見方が含まれていると考えられる。本稿では、『交換教授』を一種の大学観察録として解釈することによって、ロッジが大学文学部に身を置きながら獲得した彼の観察眼、世界の見方にアプローチする。

4. 『交換教授』における大学と大学人の姿

『交換教授』は6章からなる長編小説で、時代設定は著者ロッジ自身の渡米と重なる1969年である。主な舞台となる2つの大学、英国ラミッジ大学と米国ユーフォリック大学は、ロッジの経歴や作中の描写から、バーミンガム大学とカリフォルニア大学バークレー校を読者に連想させるものになっている。主人公はこれらの大学にそれぞれ勤務している英文学の教員で共に40歳の

妻帯者、半年間互いのポストを交換して客員教員を務めることが決まっている。物語は彼らの乗った飛行機が上空ですれ違うところから始まる。

2人の主人公は対照的なキャリアと性格を持っている。英国人のスワローが間違いのない試験問題を作ることだけに長けた博士号も研究業績も自信もない男である一方、米国人のザップは研究的にも政治的にも大学で存在感を示している自信過剰な野心家である。スワローが米国に行くことになったのは他人を疑うことを知らないお人よしだったため、ザップが英国に行こうと決めたのは関係の悪化した2人目の妻との離婚を先延ばししたかったためである。

物語は作中の時系列に沿って、2人の主人公の視点を頻繁に行き来しながら、基本的に三人称視点で進行する。片方が語ればすぐ他方が呼応し類似したトピックで語るという構造が、主人公たちの行動や大学の英国／米国らしさの対照を際立たせている。著者ロッジは2011年版に追加したまえがきでこの語り的手法に言及し、「それぞれの国の生活に特有な特徴（アカデミック生活に限らず、社会的・性的・文化的生活）は慣れぬ者の目を通して観察されることで愉快さを作り出す」とコメントしている。

主人公たちは新天地にたどり着くなり、生活環境と職場環境の両方があまりに自国の状況と異なっていることに衝撃を受ける。しかし徐々に、概ね自分の個性を保持したままで環境に適応し、それぞれの形で大学紛争にさらされたり人間関係上のトラブルに巻き込まれたりしつつも、最終的にはこのまま定住してもいいかもしれないと考えるようになる。物語の最後では、主人公2人が共に相手の妻と性的関係を持っていることが露見し、四者会談が開かれる。彼らがどのような決断をするのか明らかにならないまま物語は終わる。

この小説はキャンパス・ノベルとして有名だが、その物語において対照されるのは両国の大学だけではない。英国と米国の文化の違いに始まり、高邁な大学の理念に対する構成員の生活の卑俗さが語られ、また学生と教員、女と男といった複数の軸によって、登場人物や彼らの行動は常に別の何かと引き比べられる。さらにテキスト表象のレベルでは両国で話される英語の違いも強調される。本稿ではこうした比較の中でも特に大学の組織・制度に言及している部分に注目した。

風刺小説である以上当然の制約であるが、この物語におけるものごとの固有性や特徴は概してステレオタイプのなものであり、過剰に演出されている。書かれた内容をそのまま「事実」のように受け止めるのは当然誤りであるし、著者ロッジ自身の現実認識と同一視することもまた誤りである。たとえばロッジはバーミンガム大学と似た架空の大学、語感から掃き溜め（rubbish, garbage）や損傷（damage）を連想させるラムミッジ（Rummidge）大学を、以下のように説明する。

ラムミッジは今までずっと規模の上でも評判の上でも二流を脱したことがなかった。そして近ごろは英国大学における同類（市民・赤煉瓦大学）の多くと同じ屈辱的な運命に苦しめられている。主として古いことを理由に評価されている2つの大学と50年にわたって困難な競争をし続け、引き分けレベルに達したかと思った瞬間、新しさを理由に評価される一群の大学に人気の上でも信望の上でも追い抜かれたのである（11）。

この記述には、ある種の高等教育史観が含まれている。そしてこの記述が風刺として成立しコ

メディアとして笑いを誘うのは、名指しされない諸大学が読者にとっては自明であり、表現が過剰だとしても説明として一定に適当だからであろう。本稿の冒頭で言及した「アメリカの危険な発明品」に関しても、反発されつつも導入を決めたのは「新しさを理由に評価される一群の大学」のひとつであった。作中には米国で小説作法の講義を担当させられることになり、動転する英国人教授の姿が描かれる。米国大学に当たり前に存在する科目に対する伝統的英国人教師の極端な反応は、読者に「新しいもの」と「アメリカ的なもの」の重ね合わせを促し、英国大学文学部の保守性に滑稽さを見出させる効果を発揮する。

2人の主人公を比べる場面では、「男たちは共に彼らが通過した教育システムの特徴そのものである」(12)と前置きした後、英米それぞれの大学における学位取得の難易度や学生生活、大学に就職する際の要件などが対比的に列挙され、教員・学者としての構えの差異はそれらの教育に適応しないし適合してきた結果であると説明される。

このように『交換教授』には、その土地に固有の文化や伝統が地域を支え、そこに根づいた教育機関が国民を再生産するという素朴なモデルをなぞる場面がある。一方で、そうした文化の縦割りの類似性を否定するようなエピソードも語られる。ロッジが米国に滞在した1969年は英米双方で大学紛争が起き、大学と学生の対立がときに暴力を伴う衝突となった。そうした現実を受け、小説の中の世界でも、ラミッジでは学生が大学施設を占拠し、ユーフォリックでは大学の敷地の一部を人民公園にすることを目指した運動が起こる。既存のやり方に極端に反発する若者たちに対して、2人の主人公はそれぞれの方法で対処し、それなりに成功する。ザップが米国で培った交渉術は英国の学生たちを同様に手懐け、私生活にまで踏み込んで学生ひとりひとりに親身に向き合うスワローの態度は米国の学生たちから支持されるのである。

研究論文とは異なり、単一のモデルによって一貫性のある説明をしなければならないという制約がないため、小説の中には一見論理的に矛盾するような世界の見方が同時に存在できる。本稿においては特にこの両義性の観点から、『交換教授』における大学比較の特徴を見出したい。

この「交換」小説は職業上のポスト交換の物語であると同時に家庭交換、スワッピングの物語でもある。彼らは互いの妻と交歓し共に生活するようになるまでに異郷になじむのである。この点を中心において小説全体を見渡すと、この物語は英米を異質なものとして描いてはいるが、示唆しているものは交換不可能性というよりも交換可能性である。著しく異なっているということが共存を阻害しない、むしろ愉快なものにするというロッジの教育比較の枠組みは、現代的な多文化共生を検討する上でも希望のもてる世界の把握の仕方であるといえよう。

また、本書において、文化の体現者たる個人や地域の固有文化それ自体が流動的なものとみなされていることも、教育比較の文脈で読むうえでは示唆的である。日本語訳版の『交換教授』(2013)の「解説」で、翻訳者の高儀がロッジからの私信の一部を紹介している。ロッジによると、原題である *Changing Places* には「交換される立場、人が別の人間に変わる場所、変わりゆく場所」という「少なくとも」三つの意味があるという。異なる二つの文化を、固定された二元的対立構造で捉えるのではなく、ミクロに観察すれば交換可能性を持つような流動的特徴を持つものとして提示するロッジの手法は、変化を続ける不安定な現実を忠実に再構成するための戦略なのかもしれない。

5. 考察

本稿では風刺小説『交換教授』の解釈を通して、テキスト記述者の語りの背景にある比較観察の枠組みを探索した。その結果、ロッジは小説内の世界を構築するにあたって、一方で二国間の文化的差異を強調しながらも、他方ではその文化を体現する対照的な二人が実は交換可能であると結論づけていることが明らかになった。このことは、作品が書かれた当時の英国文学部において、米国的かつ「新しい」文学部の役割が忌避すべき危険なものであると受け止められていたことに照らすと示唆的である。さらに、こうした大学の見方を、新しいアカデミックスタッフを体現するような学内作家自身が発表したことも注目値する。当時の英国内の大学における創作活動を取り巻く環境は受容的とは言い難いものであったが、そうした反発を途中で描きながらも皮肉交じりとはいえ融和の方向性を示したことは、その後の文学部の役割の展開を見ても予言的であったと言える。

最後に、分析のプロセスにおいて表面化した、フィクションを教育学的関心から解釈の対象とする際の制約をまとめる。本作品自体はフィクションであるが、当時の大学を理解するという観点からロッジの観察の視点を利用することには可能性が残されている。彼の観察は教育学的な記録に必要な学問的な厳密さを備えていないが、観察者による語りとしての価値を持つ。

英国の比較教育学者フィリップスとシュワイスファースは、2014年に発表した比較国際教育学の教科書の第2章を「比較教育はどのように発展してきたのか」とし、学問としての比較教育の発展史をまとめた。その発展史のスタート地点に位置づけられたのは「旅行者」による記述である。比較の実践者としての旅行者は、異文化世界で見聞きしたことを自らの背景と比較し、興味をひかれた事象を報告する。フィリップスとシュワイスファースの議論においては、ホームグラウンドの存在を前提とする観察記録は、学術的な文脈で発表されたものでなくとも比較教育研究のしごとに分類される。

このような見方があるとはいえ、観察者と目的を共有せずに書かれたテキストを解釈する際には、解釈者にとっての関心が記述者にとっても重要であるとは限らないことに配慮する必要がある。更に職業物書きの巧みな文章で書かれる場合、高度に複雑な内容を一度に処理できてしまうため、日常的・技術的コミュニケーションのテキストよりも解釈の難易度が上がることが指摘できる。

過剰な演出をどのように処理するかも分析上の課題となる。過去を描写した記述資源として小説を解釈する場合、「事実」や観察者としての妥当な判断と、記述との距離を確かめるための手続きが必要になる。具体的には、他の観察者による記述や先行研究の知見による裏付けが考えられる。この手続きはたとえばインタビューデータを質的解釈的に分析するときにも同様に必要になるものだが、意図的に現実から遠ざかるというフィクションの特性から、通常の意味での実証主義・経験主義的データと比べ、相対的に丁寧な検討が要求されるだろう。

今回扱った『交換教授』という小説は、現実の出来事との近さや風刺小説という形態、キャンパス・ノベルというジャンル規定、著者の職業的背景と実体験による裏付けなど、教育学の文脈

で検討しやすい要素を多重に含んでいる。フィクション一般が教育研究にどう寄与しうるのかをさらに追究するためには、より扱いにくいタイプの小説についても分析を試みる必要がある。また、フィリップスとシュワイスファースが比較教育学テキストとそれ以外とを分かつ線に設定した、記述者が旅行者か否か、すなわち自らの見聞に基づく異文化の記述であるか否かという基準が、フィクションを分析する際にも同様に意味を持つかどうかには検討の余地がある。今後の課題としたい。

-
- 1 この『キャンパス三部作』という本は、1975, 1984, 1989年にロッジが著したキャンパス・ノベルをまとめて一冊にしたもので、ロッジ自身がまえがきとして作品解説を付している。
 - 2 1954年のエイミス『ラッキー・ジム』は英国初のキャンパス・ノベルとしてしばしば言及される。キャンパス・ノベル全体でみるとメアリー・マッカーシーの1952年『学問の世界』（原題 *The Groves of Academe*）が先になる。
 - 3 *Language of Fiction* (Lodge 1984) に収録されている。
 - 4 先行する作品との比較で読まれる、既存の文芸理論に基づく分析にかけられるといったことに加え、同僚や学生の目にさらされることにも自覚的だったはずである。こうした観点から詳細な分析を行うことは本稿の範囲を越えてしまうため、示唆にとどめる。
 - 5 このjet setという言い回しは、学会にかこつけてジェット機で世界を飛び回る大学教員たちを揶揄してロッジが使った言葉である。

【引用・参考文献】

イーグルトン, T. (1997) 『新版 文学とは何か』 大橋洋一訳、岩波書店。

大橋洋一 (1995) 『新文学入門』 岩波書店。

ロッジ, D. (2013) 『交換教授 二つのキャンパスの物語』 高儀進訳、白水社。

*

Altbach, Philip G. (1986) "Reflections on the Jet Set." *The Journal of Higher Education* 57, no.3, pp.321-323.

Barry, Peter. (2003) *English in Practice : In Pursuit of English Studies*. Arnold.

Bradbury, M. (1995) "Introduction", *Class work*, Bradbury, Hodder and Stroughton pp.vii-xiv.

Lodge, David. (1984) *Language of Fiction*, 2nd ed., Routledge & Kegan Paul.

———, (2011) *The Campus Trilogy*. Vintage.

———, (2015) *Quite a Good Time to be Born : A Memoir 1935-1975*. Vintage.

Martin, Bruce K. (1999) *David Lodge*. Twayne.

Phillips, David, and Schweisfurth, Michele. (2014) *Comparative and International Education : An Introduction to Theory, Method, and Practice*, 2nd ed., Bloomsbury.

Wandor, M. (2008) *The author is not dead, merely somewhere else : creative writing reconceived*, Palgrave Macmillan.

[Abstract]

The Comparative Framework of David Lodge's 'Changing Places'

— An observation by a writer in residence —

Marina TAKAHASHI

David Lodge (1935-) is an Emeritus Professor of English Literature at the University of Birmingham. *Changing Places: A Tale of Two Campuses* (1975) is based on his own academic life at Birmingham and experience at the Berkeley as visiting Associate Professor in 1969.

The teaching of writing fiction and producing new literature in universities hadn't been popular in the UK until 70s, but expansion of higher education brought the situation that many writers stayed in university as students or academic staff. Their observations and thoughts at that time still remain in their novels.

The purpose of this article is to explore the Lodge's comparative framework that construct the *Changing Places*' imaginary world. Through this case study of interpreting fiction, I tried to identify the limitation of the interpreting fictional text as the data of comparative education.

In the first half of this article, I described Lodge as the cultural observer and comparatist. His novel *Changing Places* has been read as a story that has certain connection with the real world of 1969.

The latter is a practical part of an interpretation of fictional text as comparative educational literature. *Changing Places* is about a story of academic life of the UK and the US. It has two protagonists and both of them are the professors of English. Their universities have an annual professional exchange scheme and they are chosen for this program. The characteristic features of social and vocational life in each country were made amusing by the foreign observer.

This study revealed the following two characteristics in Lodge's comparative strategies. First, he emphasized the cultural differences between the UK and the US, but this story is about a possibility of exchange still. Cultural differences are mentioned as a kind of interruption on the discussion of the educational borrowing, but in this story, remarkable differences aren't necessarily fatal for exchange. This framework of comparison suggests the reconsideration when we see and try to control the differences. Second, comparisons by Lodge is not fixed by the single binary opposition. Describing people and their culture as the collection of contrasts enable the author to capture the changing world as it is.